

メイデイ

五月天が駆け巡る台湾・中国・世界

◆ 法政大学法学部国際政治学科教授

福田 円

台湾を代表するロックバンドである五月天（メイデイ）が、史上最大規模のワールドツアーを行っている。五月天のメンバーは皆1970年代後半生まれで、結成20周年を迎えた同バンドの歩みは、民主化以降の台湾の歩みを象徴していると言えよう。彼らは中国にも多くのファンを擁し、台湾海峡の「緩衝材」と呼ばれる「just in between」。

ワールドツアー「人生無限公司」

5月の末、日本武道館で開催された五月天のライブへ行った。五月天は台湾のポップミュージック音楽界を牽引してきた5人組であり、今や台湾の「国民的バンド」と呼ばれることも少なくない。それどころか、アジアや世界を股にかけて活躍する、「アジアのスーパーバンド」と称されることすらある。

彼らが現在行っているのは、同バンドとして4回目のワールドツアーだ。2017年3月の高雄公演からスタートして、中国各地、東南アジア、北米、欧州などを巡った後、日本は武道館で2日間の公演をおこなった。ツアーはさらに続き、すでに公演数が100を超えた現在も、秋以降の公演が追加され続けている。各地で、これらの公演のチケットの多くが即日売り切れるほど高い人気を誇っている。

筆者が五月天を知ったのは2000年代

の前半であった。それ以来、あまり聴かない時期もあったが、話題の新曲やアルバムは自然と耳にしてきた。彼らはこれまでも数回日本でライブを行っているが、チケットを買い求めたのは初めてである。このように、筆者はそこまで熱狂的な五月天ファン（「五迷」と呼ぶそうだ）ではなく、ライブに足を運んだ動機も、五月天に会いたいというファン心理と、台湾を代表するバンドだから一度は行ってみたいという研究者の関心が入り混じったものだった。

しかしながら、筆者はすっかり五月天に魅了されてしまった。彼らのバンドとしての実力を確認することができたし、ライブの構成や演出は完成度が高く、エンターテインメントとして純粹に楽しめるものだった。また、生で彼らの楽曲を聴いて、その歌詞に映される世界観にも改めて共感した。そして、中台関係が難しい局面を迎えるなか

にあっても、彼らが自由や個性の尊さを歌いながら、中国や世界を駆け巡っていることに希望を感じた。

五月天の歩みと台湾の民主化

五月天は、ボーカルの阿信（アシン）とギターでリーダーの怪兽（モンスター）が高校時代に結成したバンドを母体に、高校の同級生や後輩にあたるギターの石頭（ストーン）やベースの瑪莎（マサ）が加わり、1997年に結成された。初期のドラマーは何度か交代したが、デビュー・アルバムをリリースした1999年に冠佑（ミン）が加わり、現在に至っている。彼らは皆、1970年代後半生まれである。

彼らが音楽に目覚めた1990年代前半は、まさに台湾の民主化期にあたる。彼らが物心ついたころは、戒嚴令の解除にともなう日本や欧米の大衆文化へのアクセスが自由になったが、台湾にはまだ彼らが先

輩と呼べるようなバンドは存在しなかった。そのため、彼らが主に影響を受けたのは、U2、オアシス、コールドプレイなど欧米のアーティストや、Mr. Children、GLAY、椎名林檎など日本のアーティストである。筆者も彼らとほぼ同世代にあたるが、このようなラインナップはわれわれが中高生時代に憧れ、繰り返し聴いたアーティストと大差ない。また、彼らの楽曲に登場するさまざまなアイコンは、同世代の日本人にとっても親しみを感じるものが多いだろう。

このワールドツアー中に、五月天は結成20周年を迎えた。ツアーに先立ってリリースされたアルバム『自伝』には、彼らの20年を振り返る、「どこでもドア」という楽曲が収録されている。この曲を聴くと、まず、20年前の台北の町並みの中で音楽少年たちがバンドを結成した様子が浮かんでくる。そして、「どこでもドア」からどこへでも飛んで行けるのは、自由の味わいだ」というメッセージが胸に響く。その後、彼らが飛び出した「外灘の景色は、教科書から飛び出してきたようで新鮮」であったが、「それほど遠く離れても台北が恋しくなる」と歌う。政治的なメッセージは強くないが、彼らの価値観とそれを育んだ台湾への愛着がよく伝わってくる。

台湾海峡の「緩衝材」

五月天の中国での人気は、さまざまな伝説を作っている。例えば、上述の「どこでも

ドア」の中でも歌われる、「鳥の巣」と北京スタジアムで2012年に開催したライブでは、2日間で20万人を動員して話題になった。現在のワールドツアーでも、広州（2回）、アモイ、杭州（2回）、合肥、鄭州、大連、濟南、太原、ハルビン、フフホト、貴陽、西安、南寧、青島、北京（2回）、瀋陽（2回）、深圳（2回）、洛陽、南京、福州（2回）、泉州、蘇州（2回）、長沙、金華、天津、石家荘、佛山（2回）、昆明、常州（2回）、成都（2回）、上海（4回）と、7月末までにこれだけの都市を廻っている。また、この他に、すでに香港で15回、マカオで3回の公演を行った。

中国にも多くのファンを擁するため、五月天の活動も、台湾海峡の政治的な情勢と無縁というわけにはいかない。2014年のひまわり学生運動の際に、五月天が公式フェイスブックに「立ち上がれ（起来）」という曲のプロモーション・ビデオを突然投稿したことは、政治的な態度表明ではないかと物議を醸した。インターネット上では、「もう大陸に来るな」という主旨の攻撃が中国のネットユーザーから殺到した。そのため、五月天は「われわれがサービス貿易協定に反対したことはなく、対立を生起させることはさらに本意ではない」とのコメントを出したが、今度はそれが台湾のネットユーザーからの批判を招いた。

この問題をめぐる五月天の動向は、当時

台湾のニュースや新聞でも報じられた。学生が立法院を占拠し続けるなか、屏東で開催されたロックフェスティバルに出演した際には、メンバーのストーンが「われわれの音楽に太陽の力があることを願う」など学生運動を想起させる発言をしたほか、マサはステージを後にする時に「サービス協定に反対」と叫んだように見えたと報じられた。ところが、五月天はその直後、北京の天安門で開催された、CMキャラクターを務める清涼飲料のキャンペーンにも登場した。そのとき会場を訪れたファンの中には、学生運動のシンボルであったヒマワリを持った北京のファンもいて、彼らを支持すると語っていたのが印象的であった。

台湾では、このような五月天の姿勢を「商業主義的だ」と批判する声もある。実際、五月天よりもさらに若い世代には、台湾語の楽曲を発表することを好み、政治的な立場をより明確に発信するアーティストも多い。しかし、中国のファンにも届くように、身近な自由の尊さを歌い続けることも、台湾アイデンティティの1つの表現だろう。そもそも、「どこでもドア」にも歌われているような五月天の歩みは、民主化以降の台湾の歩み象徴している。そのような彼らの紡ぐ音楽が、中国や世界の若者を熱狂させていることには、やはり大きな意味があるように思える。